

## 制作概要

3年前より環境芸術学会〔Institute of Environmental Art and Design〕の会員として活動しています。振り返って見ますと、立体造形（主に石材を彫刻して表現）を専門としている私は、室内より屋外を作品を設置する場として想定することが多く、周囲の環境に強く関心を持つことになりました、今回はそれらの経緯を記述することで、作品を周辺からの観点で解説します。

やがて、私の環境への関心は視覚的な事物を越えて広がっていきました。最初は立体造形作品を設置する際の地面と基礎と作品の関係でしたが、なにかんずく、作品と「光」の関係が非常に重要であるかを理解しようとした時、いかに歴史の内に、芸術、文化、文明の中に組み込まれ、又、忘れ去られようとも再び立ち現れる光の存在は、古代には全ての秩序であり、原始には全てであったに違いないと感じるようになったのです。

歴史的遺産に例をとってみれば分りやすいのですが、太陽の運行に応じて建造物が立てられます。造形物は「光」の方向に従います、農耕を中心とした社会では天文術は政治的中心で支配、権力の象徴となっています。更に、人間の生理現象を越え、人間のイメージを越えた宇宙原理の象徴と位置づけられます。

造形物だけではありません、動物、植物は太陽の運行と「光」が及ぼす光合成のおかげ（御影）で生命があると受け止める事ができます。

ここでは「光」の力、恵み、支配を示そうとしましたが何処に至る訳でもなく、如何に作品が大きな摂理の中で、未知からの贈物をうけて在るかを知ったのです。

今迄述べた事は、環境と作品の在り方には客観世界は存在せず、事実ではなく、可能性を論じようとしています。

今回の作品テーマである「2007 光を測る」とは測りしれない事象を類推しようとしている事です。

同じコンセプトで日本基礎造形学会、環境芸術学会、西宮芸術祭に発表しています。

北野 正治

「2007 光を測る」  
百花撩乱展

兵庫県立美術館



### 2007アジア基礎造形学会筑波大会

作品展会場／筑波大学総合交流会館

タイトル／「2007光を測る」MEASURE THE LIGHT

マテリアル／デジタルプリント・紙管・針金・マスキングテープ・水性塗料  
サイズ／W60×H150×D60cm

同類であるが異なった表現の作品を条件の全く異なった場所に展示



同上作品



モチーフ／ユリの花びら 実物デジタル撮影



GALLERY 北野坂 個展



兵庫県立美術館 展覧会グループ「百花繚乱展」



北野 正治

百花繚乱展「光を測る」  
2007年 兵庫県立美術館

NII-Electronic